

が、銅器に亞いで豊富なるは玉器である。其大部は儀禮又は服飾用のもので、漢代に通有の葬玉類は認められない。此外練玉、管玉等に玻璃を應用せるものが夥しく存在し、又器什、柳室内部等に漆の使用が屢々報告されてゐる點は、前述せる在銘鐘を始め、所謂秦様式に包含さるべき多數の銅器の伴出と相俟つて、本書の資料的價値を高からしめてゐる。(石澤)

洋裝堅三〇種(九寸九分) 幅二三種(七寸六分) 全一冊 序文・挿入圖版目錄及び索引等二二頁 本文一七七頁 圖版一八七葉 外ニ原色版二葉 五百部限定版 一九三四年 上海、ケレシー、アンド、ウォルシュニ會社出版

## 妙心寺名寶圖錄

今年四月恩賜京都博物館に開催された妙心寺名寶展覽會に就いては、本誌第四十一號内外彙報欄に是れを報道し、其の展觀が種々の意味に於て有意義な展觀であつたことを書いた。今其の展觀圖錄の發售を見るに及んで出陳作品の主要なもの、殆んど網羅されて、而もそれが鮮明なコロタイプ圖版に依つて複製されたことは、先づ何よりも學界に貢獻することの多大なるを喜ぶ。其の編纂の體は花園天皇御影を初めとして本寺子院歴代住持の頂相三十二幅より『諸檀越眞影』の三十七幅に及び、以下『日本畫之部』『支那畫之部』『筆蹟之部』『美術工藝之部』等に分つて大約百四十點、整然たる大圖冊を成したことも喜ばしい。たゞ三百點に餘つた出陳中、其の採擇に就いて氣付いた一二を云へば、妙心寺様頂相、と稱してもいゝ程、服飾其の他に近似の多い頂相を廿數點に止めたことは諒解し得るが、此の内に龍安寺藏、鄧林和尚像を逸したことは惜しむべきであつた。同圖は贊尾に『永正辛巳半夏日 小子等命狩野元信圖余陋質云々』とあるもので、たとひ十目の見る所、到底元信の正筆とは考へ得ないのであるにしても、資料的意義の尠からぬ作品として採擇を乞ひたかつた。又東海庵藏等伯筆達磨圖を割愛したことは如何なる意味に於ても當然と思はれる

が、是れに反して周徳に泐藏院の竹雀圖を收めて、養源院藏達磨圖を逸したことも惜しい。同圖は自分も亦滯京中、一二の史家の是れを疑ふのを聞いたことのある畫蹟ではあるが、其の印記を仔細に比較するも容易に疑問を挟み得ない作であると共に、遺品の少い此の畫匠にとつては重要な一資料と考へられる。たとひ今、一步を譲つて是れが正筆でないとしても、印記を後捺の一種と見て、當代の畫蹟たるは疑ふべきで無かつた。それに比較しては天球院藏光起筆鹿に紅葉圖、六曲屏一雙は、其の印記既に認め難く、寧ろ遙に疑問の餘地の多い作品で、靈雲院藏雪舟筆福祿壽圖は猶更それに近い。無論畫蹟の品鑑は何れは各個人の主觀に基くもの、自分の見る所、必ずしも當れりとし得ないが、此の種の圖冊に於ては成る可く廣く採擇されることが望ましかつた。(田中)

和裝帙入 堅四三・七種(一尺四寸四分) 横二九・〇種(九寸六分) コロタイプ版八五葉 恩賜京都博物館編纂 昭和十年六月 京都小林寫眞製版所發行

## 岩波講座日本歴史

本講座のうち、美術に關するもの八篇は既に第三十六號誌上に紹介したが、爾後刊行されたもの、うち今回左の四篇を紹介し、餘は便宜上次號に廻すこととした。

### 鎌倉時代の繪畫

上野 直昭

此書は鎌倉繪畫史の主流をなす繪卷物の發展の諸相を形式内容等の方面から検討したものであつて、同時代の他の繪畫には殆ど論及されてゐない。

内容は先づ「源氏」と「信貴山」との比較論より始めて、一は舊時代の美意識を他は新時代の美意識の傾向を代表するものなるを説き、兩意識の混合を「伴大納言」に見出し、それ等と「戲獸」、「粉河」、「吉備」、「華嚴」との相似異同の關係を記述し、「病」、「餓鬼」、「地獄」の發生に説き及ぼし、之等新傾向

の繪卷は類型的、裝飾的、理想的なるものから個性的、説明的、現實的なるものへの轉向を示すものであり、此傾向と英雄崇拜の時代的空氣は他方記録的な繪卷を發生せしめたとし、その最大の例として天神緣起を詳論し、それに包まれたる神格と人格とが別々に現れたるものとして「石山」、「春日驗記」は奇蹟を、「一遍」は傳記を主題とするものなるを説き、題材的に後者と似た「西行」は實は「源氏」の目的とせる情趣を線本位にてあらはせるものとなす。次いで舊美意識を持つ「寢覺」、「紫式部」を説き此の情趣の世界を全く白描にて表現せんと企圖せる「枕」の出現を述べ之等貴族文化傳統の所産と並んで武人の生活表現せる戰爭の繪卷の出現を述べ、最後に信貴山以下の初期作品に著しき諧謔的氣分の再現を「繪師」に見出し、併せて繪卷の末路を示す。

以上は本書の骨子である。敘述の過不及なきを求むるはかゝる小冊子に對して素より望むべからざる所である。個々の創見と示唆に富む論述は、同じ著者の過去の繪卷物關係の諸論文と併せ讀んで教へらるゝところ甚だ多い。

#### 室町時代の繪畫

#### 脇本十九郎

室町時代の繪畫を如拙・周文・雪舟の三家を擧げて説明し、以つてその概要を得せしめんとせられたものである。

著者は周文渡鮮の事實が文獻的に確認し得ることを説き同時に周文畫に於いて其の圖法手法共に朝鮮畫の影響を認め得ることを證し、茲に於いて如拙周文が五山禪林に山水畫を導くに至つた事情竝にこの二家の圖法が馬夏の法に則ると稱せらるゝ所以の朝鮮を徑路とするものなることを解説し、かくして二家の時代を以つて水墨畫史上の朝鮮系時代なることを提唱して居られる。

著者はこの二家に先立つ時代即ち南北朝前後の水墨畫を名付けて第一次支那系時代とせられるのであるが、この二家に次ぐ雪舟の項に於いては彼がその天才に加ふるに大陸に遊んでその眞山水を見ることによつてその大をなせるを説き同時にその畫蹟に及び、彼の時代を以つて第二次支那系時代と名付けられ

る。

如斯時代區劃に従つて三家の迹を敘せられたものでよくその核心を得たる點に於いて此の一篇の示唆する所尠しとせず、且又著者の水墨畫に於ける深き造詣と明徹なる觀察と巧緻なる表現とを認め得るものではあるが、その所説は遂に著者の所謂水墨畫正脈の三家を出でず何等之に加ふるものゝない事は著者自身も自覺せらるゝ如く、表題に答ふるに不充分、不適當の感なきを得ず、本書を通讀して多少書きやりの迹の感ぜらるゝのは遺憾である。

#### 近世武家時代の建築

#### 大熊喜邦

本篇は安土桃山時代の建築と江戸時代の建築との二章に分けて、近世建築史の概要を述べたものである。先づ第一章に於て、信長の皇居の修理、秀吉の内裏擴張等當代英傑の相次いで、皇居造營に寄與した事蹟を擧げ、次に當代武家文化の反映として、豪壯華麗な城堡建築の出現、權現造の創建、佛閣の再建及び書院造の大成に就き説明すると共に、各の遺構を例記してゐる。尙當時の武人が豪華を誇る半面に枯淡の茶道に親めるに伴つて、發達せる數寄屋造の流行を述べ、また織田氏時代に彗星の如く現はれた南蠻寺等の基督教建築の興廢をも顧みてゐる。紙數僅な小冊中に、當代建築の全般に互つて記述せる爲に、勢ひ通史の概説以上に出でられなかつたのは、亦止むを得ぬとするも、當代建築様式の特異性を究むる説のなきは望蜀の嘆に堪えなかつた。

然るに第二章は本篇の眼目とも稱すべきで、著者独自の考證による出色の文字が多い。先づ江戸時代の建築は寛永年間をもつて最盛期となし、時代の下降と共に木割の墨守等に依り遂に斬新なる手法の現はれぬ所以を説きつゝも、當代建築の特徴として、華麗なる靈廟や伽藍の特種形式として黃檗宗寺院の創建、武門政治と結合して出現せる儒教建築等を述べ、併而その遺構を例示してゐる。就中江戸文化成熟時代の住宅建築、上は柳營の殿館より下は庶民の住居に至る概觀の記述に於て、例證の豊富なると、數多稀觀の資料を掲げたるは、

流石に江戸城及び江戸時代住宅に關する造詣の深き著者の片鱗が窺はれる。

### 日本書道の變遷

伊 木 壽 一

最初に支那書道の概観なる一章を設けて簡単に再域に於ける新道變遷の迹を瞭かにし、以下本邦書道の變遷に關しては之を八期に分ち、八章に互つて之を述べる。その時代区分は概ね政治史の時代区分に従ふものであるが、各時代をその特色によつて稱呼してゐる、その一般を紹介すれば次の如くである。

- 一、摸倣期（奈良朝以前）
- 二、過渡期（平安朝前半期）
- 三、完成期（平安朝後半期）
- 四、繼承期（鎌倉時代・南北朝時代）
- 五、衰頹期（室町時代）
- 六、復興期（織豊時代・江戸時代初期）
- 七、普及期（江戸時代中期以後）
- 八、研究發達期（明治時代以後）

各時代の變遷を敘するに方つては、大陸書風の變遷とその移入の經過とを適當にその中に按配して、以て本邦の書道が、常に大陸書風の流入によつては新様を創始し、その發展過程の中に又大陸書風の輸入によつて變遷を生じ、その間一方に草假名の發達の如き問題を含む等多岐に互り敘述至難なる一篇の書道史をかくの如き小冊子の中に極めて要領よく記述したことは眞に推服に値する。加ふるにその例證として擧げられた筆蹟の如きも、必ずしも從來の書家の品鑑に従ふものでなくして嚴密な古文書學的な検討を経たものであることに充分な信頼が置き得ると信ずる。實にも此一篇の持つ重大な意義はこれが書家若くは筆蹟鑑定家の業餘にあらずして、史家の勞作たる點にある。

その敘述の態度は主に各時代の代表たるべき名筆數家を擧げてその眞蹟を提示し、之によつてその間の變遷の概要を知らしむるを眼目としてゐる。これは本書の興へられた紙幅と、その概説としての目的の爲に當に然るべき所であり、その點に於ける成功を識認するに吝かではないが、吾人が特に著者に希望したきは更に一步を進めて所謂古筆切なるものゝ檢討と、その系統的研究である。又一方では書道變遷の主流の外に立ちて孤高の書品を保つた人々に關する記述が僅少でも加へられて居たならば尙生采を放つものであつたらうと思はれ

る。これ吾人が著者の守る史學的立場に滿腔の信頼を拂ひつゝ一篇の藝術史として本書に對する時竊かに慊焉たらざるを得ないものがある所以である。

（編輯部）

菊列假綴 各册本文二五頁乃至一〇四頁 網目版圖版及挿圖 昭和九年十一月——昭和十年五月 岩波書店發行

### 美術研究所時報

囑託工學博士關野貞氏は、別項記載の如く、病氣の爲東京帝大附屬醫院に入院加療中遂に七月二十九日長逝された。同氏は昭和五年美術研究所開設と共に囑託となつて今日に及び、研究上に、資料蒐集等の上に、我が研究所の爲に盡力貢獻せらるゝ所が尠くなかつた。本誌にも屢々執筆されて居ることは記憶に新なる所であらう。同氏の訃は我が學界の大なる損失であると共に研究所にとつても痛惜に堪へぬ恨事である。茲に謹んで弔意を表する次第である。